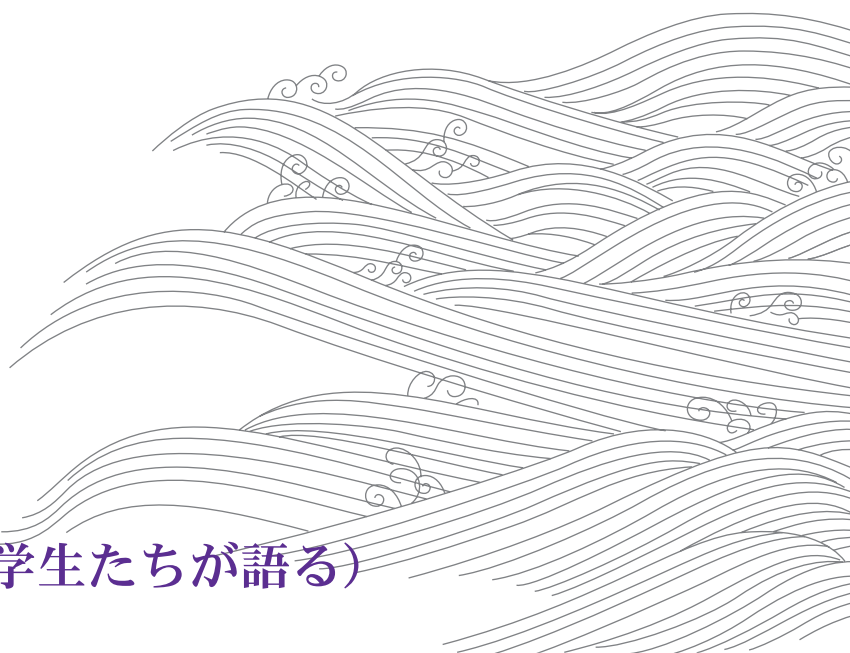


茗溪



特集

・わたしの故郷^{くに}のお正月(留学生たちが語る)

グラビア：01
新年のご挨拶

筑波大学長 山田 信博：02

茗溪会理事長 西野虎之介：03

特集 わたしの故郷^{くに}のお正月：04～09

第9回(平成22年)茗溪会顕彰：10～11

平成22年「追悼のつどい」：12

茗溪会／秋の公開講座から：13～15

茗溪学園だより：16

平成22年 秋の叙勲：17

桐の葉のつどい：17～19

季刊誌「茗溪」などを確実にお届けしたい！：20

追悼録：21

著書紹介：21

本部だより：22

編集後記：22

meikei

正月
2011
No.1068



新年のご挨拶



上中 筑波大学長

山田 信博氏

上右 茗溪会理事長

西野虎之介氏

P.2・3参照

嘉納治五郎先生像除幕式

日時 平成22年12月10日(金)

場所 筑波大学大学会館前広場

上左 除幕式 中左 参列者

この度、嘉納治五郎先生の銅像が、筑波大学東京キャンパスの占春園のほりに現存する像に続いて、筑波大学会館前広場に建立され、除幕式が行われた。

嘉納先生については、季刊誌「茗溪」1067号(2010〈平成22〉年・秋号)の特集を参照されたい。

当日は、阿江教授(茗溪会理事)の司会で、山田学長の挨拶のあと除幕式が行われ、茗溪会からは西野理事長、江田副理事長等が来賓として参列した。



追悼のつどい ↑

日時 平成22年9月11日(土)

場所 茗溪会館

P.12参照

← 第9回茗溪会顕彰

日時 平成22年11月26日(金)

場所 茗溪会館

P.10・11参照

新年のご挨拶



国立大学法人
筑波大学長

山田 信博

新年おめでとうございます。

年頭に際し、最近の大学の様子や、大学を取り巻く情勢についてお話ししたいと思います。大学の役割は教育・人材育成、研究、社会貢献にあることは、ご承知のとおりですが、現代のグローバル化の時代において、3つの視点、すなわち、学生、国際、未来の視点から新たな一年を皆さんとともに飛躍の年にしたいと考えています。

筑波大学の建学の理念では、従来の大学は、ややもすれば狭い専門領域に閉じこもり、教育・研究の両面にわたって停滞し、固定化を招き、現実の社会からも遊離しがちであった。本学は、この点を反省し、あらゆる意味において、国内的にも国際的にも開かれた大学であることを基本的性格とする、と謳っています。開かれた大学

として、より良い社会作りのために、本学の情報発信にさらに務めたいと考えています。昨年末には、Nature 誌に本紙の紹介記事が掲載され、その中で、本学の最新の研究の取り組み、国際化のための G30 プロジェクトなどが紹介されています。そして、本学の魅力や価値をさらに知ってもらいたいと願い、筑波大学ブランディング計画を始めました。

まず、大学からのスローガンとして、IMAGINE THE FUTURE. を入学式で発表しました。大学は国家の成長の原動力のみならず社会の心として、未来を想像しなければ、未来を創造できない、という想いをこめています。未来は見通しにくいと同時に無限の可能性があります。未来はどうなるだろう、こうあってほしいと想像しながら、新しいことに挑戦し、より良い社会作りに貢献したいと考えています。知識とともに未知への想像力を大事にする大学

でありたいと思っています。

今日、日本は言うに及ばず人類社会全体が、社会構造の未曾有の変化を、想像を絶するスピード感を持って経験しつつあります。新しい多くの困難な課題にも直面しています。環境、少子高齢化、雇用、格差の問題などです。世界はグローバル化し、膨大な情報は瞬時に世界を駆け巡り、人々は変化の激しいことに戸惑い、将来の道筋が不透明なことを不安に感じています。かつての高度経済成長期には、資源（ヒト、カネ、モノ）を投入することにより、社会基盤を整備することができました。

現在は事業仕分けに象徴されるように資源の有効利用が求められると同時に広く社会の理解も得なければなりません。国立大学は平成16年に法人化され、護送船団方式から脱却した自律的運営が求められています。厳しい予算の削減（毎年1%）と教職員の削減（平成22年度までに5%の総人件費の削減）の中で自律的運営を努力する状況です。予算減、人員減を大学自らが創意工夫して、業務効率を改善し、研究・教育の質向上のために、資源の減少分を外部からの資金や寄付により埋め合わせをする必要に迫られています。学生への支援を主たる目的とする基金、筑波フューチャリシップを昨年度より開始しています。

天然資源の乏しい日本の今日の発展は、優れた人材と科学技術・学術が原動力になっていますが、明治維新以来、大学はその発展のエンジンとして中核的な役割を担ってきました。多くの困難な課題に直面している変革の現代では、知の拠点としての大学の真価が再び問われています。しかし国立大学法人化5年後の現状は、教員の負担が増加した結果、教育・研究現場から疲弊の声が聞こえてきます。わが国から発信される論文の減少も指摘されています。研究や教育では効率とは対極的に、モチベーションをもって、課題をじっくり議論し、本質を見極めることや仮説に基づく周到な科学的検証を大事にします。人間相手の教育では促成栽培というわけには行きません。しっかりと育てる必要があります。研究は試行錯誤の連続です。失敗や無駄を恐れていて成功はありません。失敗からの大発見もしばしばあります。学生や教職員の可能性を最大限に開花させる努力は大事な使命で

す。特に若者たちがのびのびと自分たちの将来を考え、試行錯誤するチャンスがもつとあるべきです。若者たちが自分の道を見つけ、充実感のある人生を送ってもらいたいからです。諸外国では、国家戦略として大学への支援を増加していますが、日本では大学予算を削減し、OECD加盟国では最下位レベルという有様です。このまま大学という国のエンジン、社会の心を消耗させて、日本の未来、人材育成、科学は大丈夫でしょうか。大学を衰弱させる前に日本のエンジン、心である大学を強化すべきです。主要大学への公的研究費は米国の1/40でしかありません。苦しい時こそ、未来のためにじっくりと人材育成と学術研究がなされるべきです。育った人材と研究成果の恩恵を受けるのは未来の私たちだからです。大学の歴史は、中世ヨーロッパの時代に遡ります。学問を志すものが自然に集まって、大学の原型となる自律的組織が形成され、真理の探究とともに社会的要請の強い領域では専門家の養成が始まりました。創造的活動には社会全般のゆとりが必要ですが、人類社会の生産活動の進歩は社会のゆとりをもたらし、若者たちはそのゆとりを知的探求に向け、若者の知的創造力が発揮される場である大学がヨーロッパ各地で育成されるようになります。社会の進歩は格段と加速されます。今日の科学技術の進歩の基礎が形成され、産業革命や現代のIT革命につながります。大学は若者たちの能力や才能が最大限に発揮されるように、長い歴史をかけて育てられてきた人類の叡智の賜物ともいふべきものです。そこでは、若者たちの知的好奇心を満たし、若者たちが自ら未来を切り拓く能力を養います。私たちは、大学がいつまでも若者にとって魅力ある創造的、知的活動の自律的拠点であるように、より一層優れた研究の展開とこれに裏打ちされた教育の充実に取り組んでいます。苦しい時代にこそ、大学の存在意義を近視眼ではなく、大学の歴史的意義を感じながら、長期的視点から見つめなおし、人類の歴史的財産である大学の疲弊を招かないことを切望しています。私たちの先達である、例えば500年以上の歴史をもつ英国の old universities のように、本学も歴史を積み重ねて、その社会的使命を果たさなければなりません。

新年のび挨拶



社団法人
茗溪会理事長

西野 虎之介

協調関係が進む国際社会

明けましておめでとうございます。

新しい年の幕開けに当たって、まず二点について注目したいと存じます。

昨春秋、11月半ばに諸外国の首脳が横浜に集まり、日本国の首相が議長となってAPECが開催され、世界各国の成長戦略が討議されました。そこで見られましたことは、多国間の協調、安全と平和、共存が図られるべきであるとの了解が得られたということでありました。

勿論、これらの諸点は、日本を取り巻く周辺諸国との関係一つを取りましても、そこに見られます緊張関係は一朝にして氷解するものではないことは自明の理であります。しかもなお、お互いが努力を重ねて行くべき目標であることも間違いないところであります。

そんな視点に立って、いま、思い起こされる事がございます。それは、かの嘉納治五郎先生の生誕150周年に当たり、筑波大学東京キャンパスに在る先生の銅像と同じ原型から新しく制作された銅像が、筑波大学学生会館前広場に建立設置されまして、昨年暮れの12月10日に同地において除幕式が行われたことでございます。

嘉納先生は、本大学の前身校であります東京高等師範学校の校長職に3回にわたって就任され、のべ23年間、勤められた方であります。

嘉納先生は、鎖国の扉を開いた日本が近代国家として

諸外国と肩を並べるために「追いつけ追い越せ」の国民的な願望を満たそうとした明治期にあつて、これからの新しい時代を担う指導的人材の育成に努められたということは誰もが認めるところでありますが、ここで注目したいことは、単に国内的な視野からのものではなく国際的にしかも多方面にわたつての指導的な人材の育成や交流の活性化を図られたということでもあります。

嘉納先生が創設されました近代柔道が、今日、国際的な競技として広く各国で採用されていることは勿論、先生は多くのスポーツの普及にも尽力され、日本最初のIOC委員として、東京オリンピック開催の決定を見るなどの活躍をされる一方、諸外国からの留学生を多数受け入れられました。いま、世界の国々が国際協調を進めるために大きなテーマとして取り組んでいる国際交流、国際理解という視点は、既に嘉納先生が持たれ具体化しておられたことでありまして、言い換えれば、先生は、今日の視点の先鞭をつけられた先駆者であつたと申せましょう。学内に建立された嘉納像を見上げながら、その先見性の再確認をすることが、新年の第一の注目点であろうと存じます。また、国際交流は、現在、筑波大学が学内を挙げて取り組んでいるテーマの一つでもあります。

新しい方向を求めて組織を見直す

第二には、私たちが当面する問題に、平成20年12月1日に施行されました公益法人改革関連三法に基づく法人改革があります。

茗溪会の新しい法人の姿としては「一般社団法人」としての方向が昨年の総会の席上で決定され、いま、新しい定款をはじめとした諸種の規定等を検討する専門委員会に、現在、懸命に汗を流していただいているところでございます。

特に、茗溪会が筑波大学の同窓会として大学との協力・協調関係を一層色濃くする方策、本部と支部との関係や地域に対しての社会貢献や顕彰等の、社会に対する使命が検討対象です。

一方、筑波学都資金財団では、これから益々、充実強化、増員が予想される留学生による学生宿舍の利用への

対応について熟慮検討しているところでございます。

それは、大学にあつては、学生に対して教育、研究という分野を開かれた大学として担われるとき、財団は社会人としての人間形成での育成や日本文化への理解の深化と共に、一人一人が持っている夫々の国の文化や生活分野への相互理解を、いわば異文化交流のベースになる環境作りに重点を置いた学生宿舍の管理を法人の基本として、大学との連携の強化策を図る等でございます。

もう一つ、財団において検討しておりますことは、研修センターの事業内容の強化策でございます。

研修センターは、単に宿泊者の増加を図ることだけではなく、財団としての自主的立案による研修等を中心にした事業展開を図り、その一つのかたちとして宿泊を必要とする内容に対して宿泊設備が完備しているという姿こそが、本来的なものとして求められるのだと考えられ、そのような充実強化策を、将来方向としても探っていく重要なテーマだと考えております。

いま、この「法人化の組織替え、見直し」という機会を、好機としてとらえて、大学、茗溪会、資金財団と三者の関係強化策を模索しているところでございます。

また、昨年から茗溪学園の中長期計画を検討する委員会も立ち上げました。

茗溪学園は、ご案内の通り、筑波大学が当地に開学され、付属的な学校が必要だとの要望もあつて、茗溪創基百周年を記念して、茗溪の先輩方のご尽力で創立された学園であります。この学園も30年を越え、中長期的には施設の老朽化対策を検討する時期に来ておりますし、教育内容の改革充実も焦眉の急であります。一方、大学との高大連携の更なる強化等、それらの課題を検討する委員会を組織したところでございます。

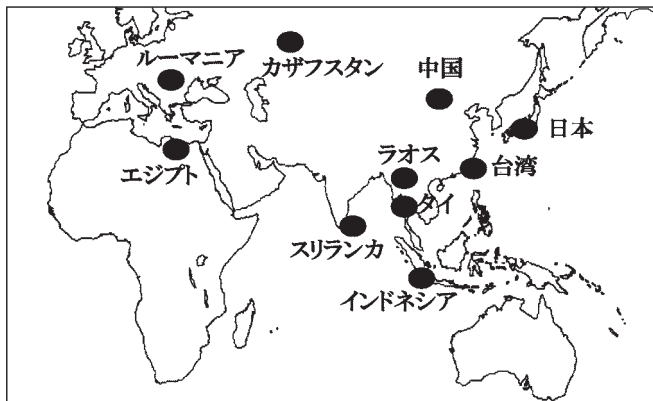
このように見て参りますと、私たちの周りには、乗り越えなければならぬ課題が山積みされております。今年もうかうかしてはおられない一年になるうかと存じます。

会員をはじめ関係の皆さまには、倍旧のお力添えの程をお願い申しあげまして、新年のご挨拶にかえさせていただきます。

特集

くにわたしの故郷のお正月

留学生たちが語る



私たちの日本では、お正月の行事はたいへん伝統的な行事です。たとえば、食べるものについては雑煮をはじめとしてお正月らしい食べ物があります。正月の儀式もあります。しかも、この小さな島国の中だけでも、各地域によってその風俗がそれぞれ少しずつ違うのです。

世界でも各地、各文化圏に、特有の伝統行事があります。

筑波大学の留学生たちに、それぞれの故郷（くに）のお正月を紹介していただきました。

この特集の編集にあたり、筑波大学副学長塩尻和子教授、留学生センター長渡邊和男教授、加納千恵子教授、留学生交流課水野課長補佐の皆さんのご協力をいただきました。

私の故郷の

イデュル・フィトゥリ

ルッシー・リドワン（インドネシア）

Lussy Novarida Ridwan

人文社会科学部国際地域研究専攻研究生



私の故郷インドネシアの西スマトラでは、日本のお正月に相当する行事としてイスラム教「イデュル・フィトゥリ」があります。この行事は毎年イスラム教の断食明けに行われるものです。二日間行

い、その日は祭日となります。

まず、一日目は朝6時半頃から男女とも正装（ほとんど白い服）して、その地域にある広場に集まります。祭壇が設けられ、代表がそこに立ち、前の方には男性たち後ろには女性たちが並びます。そこで、みんな1時間ぐらいお祈りをします。その後、それぞれ実家（結婚している場合は、夫の実家と妻の実家にそれぞれ一年置きに行く）に戻って、まずダイニングに集まります。料理は前夜から用意しておきますが、おかずとして最低3種類以上作ります。必ず作るのには椰子の葉に包んだご飯とカレー。その他、牛肉、鶏肉、魚、サラダなどを用意します。また、フルーツポンチやビーナッツ、それに3種類以上のクッキーもテーブルの上に置いておきます。おやつとして甘いものも用意します。その食事が終わってから別の部屋に移り1年間の自分の行動などを反省し、家族の前で告白をします。それに対して、両親からアドバイスを受けるのです。

食事が終わった頃に、近所の子どもや知らない子どもたちがたくさんドアの外に来るので、その一人一人に硬貨をあげます。午後は、親戚に挨拶をしに行きます。そして、その家でご馳走になります。そのとき、その家に子どもがいればお小遣いをあげます。これは日本のお年玉と似ていますね。

二日目は、前日いけなかった親戚回りをします。結婚

している場合は相手の実家を訪問します。ご馳走をいただいて、一日目と同じようにここでも反省をします。自分の実家が近い人は帰宅し、家でのんびり過ごします。子どもたちはお小遣いをたくさんもらうので、皆それを持って、主に学用品や靴やかばんなどを買いに行きます。中にはおもちゃを買う子どももいます。この行事はインドネシアのイスラム教徒にとって、とても大切な、楽しい行事です。

お正月の儀式

ディルシーヤ（スリランカ）

Dilusha Dehipitiya

国際地域研究専攻1年次



私の国スリランカでは、お正月の行事は大変伝統的な行事です。日本とは違い、4月14日がお正月で、それは占星術によって決定されています。

4月になると、「エラバデユ」という花が咲き始めるし、「コハ」と呼ばれる鳥が鳴き始めることとお正月が近づいているというメッセージをみんなに知らせます。

まず占星術によれば、旧年から新年に変わる「ノナガタヤ」（ニュートラル時間）と呼ばれる時間があって、その時間までに掃除やお正月の食べ物も準備し終え、火を消すのです。そして、その時間の間、いずれかの宗教活動や伝統的なゲーム



スリランカのお正月はココナッツミルクのポットに火を付けたところから始まる。
(写真提供・ワコーインターナショナル)

のみを行うことになっています。お正月には占星術によって決定された時間「ネカタ」（いい時間）に様々な儀式がおこなわれます。みんな、ある決まった時間に同時にお正月の行事を行うことが、この国のお正月の特徴です。

まず、お正月の儀式は火をつける行事から始まります。前ページの写真に見られるように、普通、ココナツ・ミルクを入れたポットに火をつけるのです。この行事の意味合いはミルクを沸騰して吹きこぼれることで家族の繁栄を祈ることです。それと同時に、新年を占うことも含まれています。その後、伝統的な食べ物である「ミルク・ライス」を作ることは、どの家庭でも行う行事です。

次に、食事の時間に家族みんなでミルク・ライスとお正月料理（ケウン、コキス）を味わうのです。まず、家庭のお父さんか伯父さんが、みんなにミルク・ライスを食べさせてから始まることも特徴的です。食事後、「ブラテュ」（Bulat leaves）をあげて両親や年上の人を拜むことも主な儀式です。その時、日本と同じように両親からプレゼント、お年玉をもらいます。子ども以外は両親や家族の人にプレゼントをあげることもします。

正月の服装について言えば、女のひとは「オサリヤ」、女の子は「ラマサリヤ」、男性は「ナシヨナル服」と呼ばれる服を着るのが普通です。

最後に、お正月の日の夕方になると、外はお正月の伝統的な遊びをする子どもや大人で賑わいます。例えば、パン食い競争、ロープを引くこと、まくら遊び、目隠しして象に目をつけること、風船わりなどの、様々な遊びがあります。

以上述べたように、様々な伝統的な儀式が行われますのでスリランカ人がとても大事にしている行事の一つとしてお正月があげられるのです。



タイの正月では水かけ祭りが行われる
(写真提供・タイ国政府観光庁)

タイの「ソングラーン」

ラルアイソング タナパット（タイ）
Rarnaisong Tanapat

国際地域研究専攻2年次



真夏に行われるのです。

タイにおいても、1月1日を元旦として祝っています。が、伝統的なお正月は4月13日から15日までであり、この3日間は「ソングラーン」と呼ばれています。13日が近づく、お正月を家族と過ごすために、多くの人は実家に帰りはじめ、全国各地でだんだん賑やかになっていく様子がよく見られます。

また、ソングラーンの間に水を掛け合う習慣があります。4月は1年で最も暑い時期なので、この期間中は至るところで人々が楽しく水を掛け合ったり、水鉄砲などで遊んだりして、夏の暑さを解消するのです。バンコクやチェンマイといった大都市では、ソングラーンの盛大なイベントが行われ、

タイ人にも外国人にも大人気です。最近ではタイの伝統的な服装を着て、ソングラーンを過ごす人は以前より少なくなってきたと思いますが、このようなイベントではその姿がまだ見られます。

同時に、昔から伝えられてきた正月行事も広く行われています。

角餅の雑煮と書き初めと

岡田 育実（日本・岐阜）

人文・文化学群日本語・日本文化学類4年



私は岐阜県出身である。

大学進学と共に親元を離れ、現在はおくばで一人暮らしをしている。したがって長期休暇でもないと、なかなか地元へ帰省できないことが多いのだが、少なくとも年に2回は地元へ帰省するようにしている。それはお盆とお正月の時である。今回は「お正月」特集ということで、我が家のお正月の過ごし方を、みなさんに少しでも紹介したいと思う。

まず、大晦日から元旦の過ごし方について。我が岡田家では、毎年12月31日～1月1日にかけて家族旅行をおこなっている。したがって大晦日の夜はたいして宿泊先の旅館で年越しそばを食べ、家族揃って紅白歌合戦を見て、皆でカウントダウンをしたあと床につく。翌朝は、たいして私は、部屋に響き渡るテレビの音（新年のお笑い特集番組の音）で目を覚ますのであるが、起床後は両親に新年の挨拶をしてお年玉をもらい、家族みんなで旅館の近くの神社へ初詣に出かける。お参りをし、お守りを買った後、家族みんなでおみくじを引いて今年の運勢を占う。その後、少し観光をして家に帰るのだが、この年末年始の家族旅行は、私が小学生の頃からほぼ毎年かさず行っており、今では我が家の定番行事の一つとなっている。

次にお正月の食事についてである。朝食はたいして母が用意したおせちやお雑煮を家族みんなで食べる。おせちはスーパードのお惣菜と母の手作りが半々くらいの合作で、お雑煮は岐阜県らしく、名古屋文化の影響を受けた質素なものだ。お雑煮の具は餅菜（正月菜）と呼ばれる小松菜に似た葉っぱと角餅（煮て用いる）と鰯節のみで、汁は昆布やカツオだしと醤油ベースのすまし仕立てとなっている。そして2～3日ほどおせちを食べ尽くすと、

仏教の国といわれているタイでは、仏教に関わる行事がソングラーンの期間にもよく行われます。寺院へ行く人が大勢おり、そこで仏像に水を掛けたり、お坊さんに料理や花といったお供えをします。これらの行事によって、心がきれいになり、功德を積むことが出来る信じられているのです。更に、敬意を表すために、目上の人の手に水を丁寧な掛ける習慣もあります。目上の人は水を掛けた人に祝いの言葉を贈り返すので、とても暖かい雰囲気です。その後、家族全員が揃って、雑談しながら食事をする事が多い。故郷を離れている人達にとって、とても貴重な時間と言えます。

タイの伝統的なお正月は、外国人の間で「水掛祭り」として有名ですが、その背景には、家族や身近な人への思いやりを示す習慣が存在しているのです。ソングラーンと言えば、水掛け合戦の楽しさを思い出す人が多いのですが、ソングラーンの本来の伝統的な行事も忘れないでほしいと思います。皆さん、タイの真夏は暑くてしょうがないかもしれませんが、チャンスがあれば是非、タイのソングラーンを体験してみたい。

ラオスの「ピーマイラオ」

マティナー プマリンノー（ラオス）

Phoumarino Mathina

国際地域研究専攻研究生



ラオスはインドシナ半島の中心に位置し、5つの国に囲まれています。

ラオスの魅力の一つは仏教寺院やそれに関する行事等が挙げられます。特に、国中で行われるラオ

スのお正月は有名です。

ピーマイラオは4月に行われ、「水掛祭り」として外国人にもよく知られています。ラオスの4月は非常に暑い時期なので、昔の人がどうすればその暑さを軽減できるかを考えた結果、お互いに水を掛けるようになったとい

われています。

しかし、ラオス人の信念によると、ピーマイラオの由来はイソップ物語にあります。特に、世界文化遺産に登録されているルアンパバーン市では、その物語が受け継がれる中でピーマイラオを行っています。例えば、現在ルアンパバーンでしか行われない伝統的なパレードがあります。それはミス・ピーマイラオのパレード、50数名の僧侶が車に乗り、待ち受ける人々が僧侶に水を掛けるというものです。

ラオスのお正月は毎年4月14日から16日までの3日間行います。初日が「大晦日」、2日目「前の年と新しい年の間の日」、最終日が「元旦」と呼ばれます。

初日は水掛けが始まる日であり、人々はお寺に向かい自分が今まで犯してしまった悪いことを反省して、清水を仏像に掛けることが一般的です。そして、僧侶に悪いことを追いつけてもらい、僧侶に聖水をもらって帰宅します。また、新年が良い年であるように、家族全員がその聖水で水浴びをします。

第二日は、新年を迎えるにあたって、皆で家屋を掃除します。昔からの伝承により、この日は、昼寝をしてはいけなと信じられています。

最終日、新年が始まるので、朝、各地域のお寺で托鉢が行われます。さらに、多くの家庭でラオスの伝統的な儀式「バシー」を自宅で行ってお祝います。バシーとは、健康や幸せを祈ってお互いに手首に木綿糸（白・黄色等）を結び合うものです。さらに、重要なことは子どもが自分の親に対して、失礼な言葉遣いや良くない行動を謝罪する意味で親の手に清水を掛けることです。

食に目を向けると、ラオスのお正月によく食べられるものとして、ラオスの伝統的な料理「ラープ」というものがあります。ラープは「運が良い」を意味します。つまり、ラープを食べたら幸運になると信じられているのです。さらに、辛くてさっぱりした麺類の料理「カオ・ブン、ミー・カティ等」にも人気があります。

このようなピーマイラオは、ラオス人にとって非常に大事な行事です。ラオス人の宗教でもあり、伝統的な習慣を保持するともいえると思います。

今度は焼き餅を食べ始める。角餅を網で焼いたものに醬油をつけて、のりで巻いて食べるのである。

また、我が家では毎年2日の夜に私と姉と母の3人で書初めを行っていた。「飛躍」、「克己」、「誠実」など今年の目標を各自が半紙に書き、それをダイニングの壁に1年中貼っておくのだ。私が大学に進学し、実家を離れてからはもう行っていないのだが、今でも時々実家に帰省しダイニングの壁を見上げると、当時のことが思い出され懐かしくなる。

以上が我が家の正月の過ごし方だが、日本のお正月といっても地域や家庭によって過ごし方は様々だと思う。みなさんの家ではいかがでしょうか。

お雑煮と丸餅と「たわら」

山下 悠貴乃（日本・愛媛）

人文社会科学専攻 国際地域研究専攻



私の故郷は四国の愛媛県である。愛媛県は瀬戸内海に面しており、魚介類がたくさん獲れる、比較的温暖なところだ。そんな愛媛での正月の過ごし方をご紹介します。

新年を祝うのは大体一月一日から三日まで3日間であるが、準備は12月の終わりから始まっている。特に12月31日を大晦日といい、その日は正月を迎えるための準備に大忙しである。その日は、家の中やまわりなどの大掃除をしたり、しめ縄、鏡餅、門松などの正月飾りを準備する。

しめ縄は、神棚や台所、トイレなどを始め、車や自転車などにも飾る。鏡餅は、床の間や神棚に供える。門松は、一般的には松の枝に竹や梅が添えられたものが多いようであるが、私の家では松の枝を家の外の門の両側に飾りつける。一通りの準備ができたなら、その日の夜は年越しそばを食べる。テレビを見ながらゆっくりと過ごし、年が明けのを待つのである。

私の故郷の「春節」

リン・エイ(中国)
(林 穎)

日本語・日本文化学類特別聴講学生



お正月は日本の伝統的な行事であり、西暦の1月のことです。それに対し、中国のお正月は旧暦の1月で、「春節」あるいは「過年」(年を過ごし新たな一年を迎えるという意味です)といわれ、最も重要な年中行事だと思われます。

旧暦の1月1日から、1週間の連休があります。しかし、新年の雰囲気はその前から既に始められています。旧暦の12月23日からは大掃除やお年越の用品の用意などのお祝いの準備段階に入ります。その時、道で露店市が賑やかです。赤い春聯や中国結などの飾り物で道も赤くなったようであり、お年越しの準備で交わり合う人々の顔に喜びが見えます。全てが赤く温かい新年の雰囲気にもまれていきます。

そして、1年の最後の日、大晦日です。お祝いの準備が最後の段階に入ります。ドアや入り口の両側に春聯壁や窓に年画などを貼っておきます。特に、切り紙の「福」の字をわざと逆さまにして貼っておくこともあります。なぜかという、中国語で逆さまを意味する「倒」は到来の「到」と同じ音ですので、逆さまにすれば、「福」がやって来たという意味になるからです。

いよいよ除夜(中国語で「除夕」という)がやってきます。大晦日は一家団欒の日に見られ、どんなに忙しくて遠くても実家に帰るのは中国の常識です。家族全員が揃って「団円飯」を食べ、中央テレビで放送される「春節聯歡晚会」という番組を見たり、話し合いながら新たな一年を迎えるのが習慣になっています。

ここで欠かせないのは餃子や魚などの食べ物です。中国の北方で、餃子には新と旧が入れ替わる「更歳交子」という意味があり、また「元宝」(昔の金)の形に似ているから、山盛りに盛られた餃子はお金持ちになるという意味を持ち、更に餃子に綺麗に洗ったコインを包んでおき、一番先に食べ当てた人はその年に運がいいと言われている。

そして、中国語では「魚」の発音と「余裕」の「余」の発音とが同じで、とても縁起のいいものだと思われています。

一方、南の方では、お餅を食べる習慣もあります。甘いお餅を食べると、新しい一年がお餅のように甘くて楽しく過ごせるという言い方があるのです。

部屋の中から餃子の具を板で切る時の「タンタン」の音が家族の歓声と一緒に流れてきて、外の爆竹の「ピーリバーラー」などの音と混じり合って、除夜の楽しいソナタになります。

そして、新年の鐘が鳴り出し、新年を迎えた家族たちはお互いに新年の挨拶をし、年長者が子どもたちに「お年玉」(中国語では「庄歳銭」「紅包」という)をあげます。

普段、お年玉はそのまま渡すのではなく、赤く綺麗な袋に入れて渡します。紅色は力、喜び、楽しい運を象徴する中国人の大好きな色であり、「庄」は邪悪な神を押しつぶし、「歳」は「崇」と同じ発音のため、庄歳銭をもらった子どもは平安に一年を過ごすといわれています。

正月の初日から、親戚や友人や知人、商売上の付き合いのある人々の家を訪ね、新年の挨拶をする年始回り(中国語で「拜年」という)が始まります。

挨拶の言葉は、「新年好(良いお年を)」「新年心想事成(自分は思う事が実現出来るように)」「恭喜發財(財産がたまるように)」「恭賀新禧(新年の喜びを)」「新年好」などのめでたい言葉です。

民間では、お正月は旧暦の正月初一から、十五の元宵節までだと思われています。この期間は、一年間ずっと頑張っていた人々がリラックスして新年の喜びを楽しんで過ごし、過ごした一年間の自分をまとめ、来年の計画を立て、そして、また仕事や勉強に全力で走れるようにする時間です。

正月の朝、まず一番にすることは新年のあいさつである。家族がお互いに「あけましておめでとうございませう」と言い合うのだ。

正月の食べ物として欠かせないのがおせちと雑煮だ。おせちには、数の子、昆布巻き、黒豆、なます(大根と人参の酢もの)などが入っている。その中でも特に私は毎年祖母が作ってくれる、大きくてふっくらした黒豆が大好きである。

お雑煮は、白味噌仕立てで、丸餅とたわら(餅の種類で、餅をついたものに白米が混ざっている)、里芋、人参、真菜が必ず入っている。しかし、このようなお雑煮はおそらく他の家庭では珍しいと思う。

他の家庭のお雑煮はすまし汁で、たわらや真菜は入っていない。そもそも、たわらや真菜は愛媛県のスーパリーでは売っていないのである。というのも、私の母は和歌山県出身なので、その地方のお雑煮を作ってくれるからだ。そのため、年末に祖母の家に行ったとき

にたわらや真菜を買い求めて来る。食べ物その他、忘れてはならないのが初詣である。家族で家の近くの神社に行ってお参りを。着付けが大変なので毎年ではないのだが、着物を着てお参りに行くこともある。

また、年賀状を読むのもお正月の楽しみの一つである。最近では携帯電話のメールで年賀状のやり取りをするものが多くなったが、やはり、手紙が手元に届くというのうれしいものである。



わが家のお正月は初詣からはじまる～宮司さんと記念撮影

赤い春聯／守夜／爆竹

サイ テイイ (台湾)
(蔡 葦蕤)

国際日本研究専攻



台湾では近年、日本と同じように新暦の1月の到来を祝うようになっていますが、お正月といえやはり旧暦のほうが盛大です。中国と同じく、台湾では赤がめでたい色なのです。それゆえ、玄関には赤い紙で書いた春聯を貼り、居間には様々なお菓子を盛った赤い入れ物があり、お年玉も赤い封筒で渡します。街の中も提灯、財神爺、爆竹の形の飾り物などで赤一色となります。

大晦日の前に、食材やお正月用品の調達は、いつも祖母が近所の市場や迪化街という多くの店が並ぶ通りで行っています。台北には店がたくさんあるので、お正月の料理を一から作る人が少なく、発糕や紅龜粿などのお菓子、鶏の丸焼きなどは既製品を買う人が多いようです。私の実家もそうですが、それ以外の魚料理、肉料理やスープなどの様々な料理は祖母が作ります。「お正月の暴飲暴食に注意しましょう」という呼びかけが出るほど、台湾の人はお正月中たくさん食べます。特に大晦日の夕食は豪華であり、毎年祖母が腕を振るって、家族全員が食べきれないほどの料理を作ってくれます。食後は家族全員でテレビを見ながら、子どもたちがゲームなどの遊びをし、大人たちが麻雀をする場合が多いです。お正月にはちよつとした賭けなら許されるという習慣があるため、麻雀をする大人たちはいつも真剣です。そのとき、決して「輸」という負けを意味する字と同じ発音の「書、梳、舒」を言うてはいけません。縁起が悪いからです。こうして家族全員で楽しく過ごして朝まで寝ないこともありますが(それを守夜という)、元日の零時になる直前、アパートの窓から長い爆竹を吊るして、元日になった瞬間にそれに火をつけるのが一大イベントです。近年は規制

されるようになり、あまりできなくなってきましたが、小学生のとき、町中一斉に爆竹を鳴らして新年を迎えたのがとても印象的でした。

「初一早、初二早、初三暎到飽」という台湾の諺のように、台湾のお正月は元日に早起きして父側の親戚に挨拶し、二日の朝一に母の実家に帰って母側の親戚に挨拶し、三日から暫く自宅でのんびりすることが基本です。来日して以来、旧正月の時期はいつも学期中であるためなかなか帰れず、賑やかな台湾のお正月がとても恋しい。

遊牧民のナウルズイベント

カリコワ グルナズ(カザフスタン)
Kalykova Gulnaz

国際地域研究専攻1年次



「ナウルズ」は中央アジアの主要な祭りの一つです。これはカザフで3月22日にお祝いされます。ナウルズはカザフにとっては一番

大きくて貴重なイベントです。カザフの人はロシアの一部になる前は遊牧民族でした。夏のわずかな期間を除けば、厳しい冬の自然と戦うなど忙しい生活をしていた民族にとって、ナウルズは各部族が集まる重要なイベントだったのです。ナウルズの日には自然が目覚めるように新しい人生が始まると信じていました。

今年からカザフではナウルズ三日間を祝日になることになりました。ソ連の支配下当時はナウルズが禁止されていたことから、ソ連時代の人にとってなおさら嬉しい3日間です。ナウルズの日は新しい服を着て、親戚や知り合い、また隣人の家族を訪問したり、招待したりします。そしてお金や物品を借りたり、冗談や悪口を言っても許し合う日でもあります。

子どもにとっても、ナウルズはナウルズコジェという料理から始まります。ナウルズコジェは新年の日だけに作

られます。牛乳から作るケフィールス

ープに、細かく切ったお肉やエンドウ豆や小麦、トウモロコシ、アワキビ、ミルク、塩の七つのものを入れて作る神聖な食事です。その他の材料は、場所によりまた家族によって違いますが、この七つの物を入れることが大切です。それを食べて一年間元気に過ごそうという意味合いもあります。自慢じやありませんが、母のナウルズコジェは一番美味しいです。

ナウルズイベントは、各地の広場で楽しむことができます。ふつう10時からまた11時から始まります。ステージが作られコンサートやスポーツゲームが行われます。コンサートはナウルズを主題にした舞台から始まるものが多いです。舞台では寒い冬の日が終わって春の青草木が眼覚めることを見せます。プログラムの魅力的な部分はアイティスです。カザフ生活の重要な部分は音楽で、出演者はアクヌと呼ばれます。アイティスはアクヌが伝統的な音楽品のドンブラに合わせて詩を詠んで競うものです。特に高齢者が楽しめる部分だと思います。ナウルズなどすべてのカザフの祭りでは、遊牧民だっ



西カザフスタン・アチラにてナウルズビィダンス

たことを表す伝統的なゲームを見ることが出来ます。例えば、コクパルは伝統的なカザフのゲームで、選手の二つのチームが馬に乗ってレスヤギの死体を運んで競争するゲームです。バイガは様々な距離のレースのことです。乗り手と馬、両方の競争です。アウダルスパクは乗馬のレスリングで、目的は相手を馬から引き落とすものです。クミスアルは銀を取るという意味を持っているゲームです。選手はかなりのスピードで馬を走らせながら地面からコインを拾い上げるものです。イベントはだいたい午前4時〜5時まで続きます。

ルーマニアのクリスマス

マダリナ ビタン(ルーマニア)

Madalina Vitan Filoftia

文芸・言語専攻研究生



日本では、一年で一番大切な祝日はお正月だと思えますが、ルーマニアでは、宗教的にクリスマスがその役割を果たしています。ルーマニアの宗教は、正教というキリスト教の一派であり、クリスマスの日(12月25日)にイエス・キリストの誕生を祝います。しかし、次に述べるように、ルーマニアにおけるクリスマスの祝い方には、キリスト教が来る以前の異教の古い習俗もまざっています。

クリスマス日の準備は伝統的に12月20日から始まります。

遠い昔から、20日には、田舎の人々が自分の家庭で一年間飼っていた豚を殺し、その肉でクリスマスの伝統的な料理を作ります。豚を殺すのは、キリスト教伝来以前の古い習俗です。それはその頃の民族が良い一年になるように、生け贄として新年の神様に豚を捧げるという習慣があったためです。

この習慣をやめさせることができなかったキリスト教は、生け贄の対象を変えましたが、現在でもキリストの

誕生祝いの前の1か月間、肉、卵、乳製品を食べないで、断食していたルーマニア人が誕生祝いの日に豚肉を食べるのは当たり前のことなのです。豚肉からできた料理以外に、クリスマスの日には、コゾナクという甘いパンもなくはないものになっています。

23日には、親がクリスマスツリーを飾っている間に、子ども達は近所の家から家へ「良い一年になるように」というお祝いの歌を歌って回り、ごほうびとして、りんご、くるみ、ビスケットなどをもらいます。

24日の夜(クリスマスイブ)には、男の子だけが近所の家から家へ、キリストの誕生に関する聖歌を歌って回り、お金などをもらいます。

クリスマスの当日(25日)は、一般的に、皆で3日間から4日間かけて、一所懸命作った料理を食べたり、テレビの特別番組を見たりして、家族と一緒に時間を過ごします。子ども達は特にクリスマスの朝を楽しみにしています。それは、朝起きたとき、クリスマスツリーの下に、サンタクロースからのプレゼントを見つけるからです。

エジプトのお正月

アリナ(エジプト)

Lina Ali

文芸・言語専攻研究生



エジプトでは、日本のお正月のような特別なおせち料理を食べたり、小さい子どもたちにお年玉をあげたり、新しくきれいな洋服を着たりするのは、断食明けの後

の三日間の祭礼のときです。

祭礼の最初の日の朝、エジプト人のイスラム教徒はみんな家に一番近いモスクに礼拝に行きます。そして、「明けましておめでとうございます」とまったく同じ意味を持つアラビア語のお祝いの言葉を言い交すのです。

エジプトでは国民の90%がイスラム教徒なので、イス

ラム教のカレンダーに従っています。太陽暦ではなく太陰暦というカレンダーで、新年は12月31日ではなく、毎年11日間ずれてきます。

このように、イスラム教のお正月は太陽暦のお正月よりも大事なのですが、一方、12月31日のお正月を祝う人もたくさんいます。

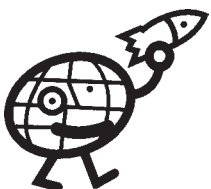
1月1日は、学校も仕事もあり、特別な行事は特になのですが、12月31日には夜から夜中にかけて新しい年が来ることを、家族や親せきや友人たちが集まって、みんなで夜が明けるまで、テレビでお正月の特別な番組や映画を見たり、子どもたちにプレゼントをあげたり、美味しいご飯を食べたりして、新しい年を迎える習慣があります。

しかし最近、家族がみんなで外出して、どこかで食事したり、映画館へ映画を見に行ったりしてお祝いする人も増えています。

また、俳優さんやお金持ちの人たちがお正月の日に高級ホテルやレストランで夜12時から行われるパーティーに参加して、朝までダンスをしたり、食事したりすることもあります。

エジプト人も地方によってお正月の習慣が違います。例えば地中海のアレクサンドリアという町では、昔ギリシャ人が多く住んでいたため、大みそかの日に古いものを窓から捨てて、前年のよくなかったことを忘れようとして新しい年を迎えるという、ギリシャから持ち込まれた習慣があります。

以上のように、エジプトでは12月31日のお正月はあまり重要ではなく、断食明けの3日間の祭礼と4日間の犠牲祭が一番重要です。その祭礼には、日本のお正月の行事とまったく同じ行事を行うのです。また、エジプトの中でも地方や人によってお正月の習慣が違っているのです。



第9回（平成22年）

茗溪会顕彰

茗溪会顕彰は今年第9回目を迎え、11月26日に東京・茗溪会館で顕彰式と祝賀会を行いました。

今年度の顕彰は、社団法人茗溪会顕彰選考委員会により、全国から6団体と個人4人が選ばれました。

地域社会で広く社会に貢献している青少年や一般社会人を顕彰対象とし、茗溪会の公益事業として行われているものです。

この日、顕彰状を授与した茗溪会江田副理事長は、「国際、伝統文化、環境、介護福祉など多様な分野での社会貢献活動で、時間と労力を払われていることに心から敬意と感謝を申し上げます」と述べました。

祝賀会では、来賓として連見

孝筑波大大学院教授から、「受彰された方々は、

この閉塞状況にある社会の中で多くの人に夢と希望を与えてきたと確信し、それを顕彰する茗溪会に敬意を表します」と祝辞がありました。

次いで受彰者の皆さんからそれぞれ活動のお話をスピーチしていただきました。

顕彰受彰者紹介

（順不同・敬称略）

団体

神奈川県立小田原城北工業高等学校

デザイン科有志

神奈川県

（代表生徒

中川幼菜、川口珠里さん

指導 大和田憲一教諭）



同校デザイン科有志は、平成5年から市内を走るパッカー車（ごみ収集車）にペイントする活動を続けている。

カラフルな楽しいデザインでごみ収集車のイメージを変え、子どもから大人まで街で同車を見かける人々の目を楽しませ、街の明るい雰囲気作りに努力している。

野田双子織研究会

埼玉県

（代表 佐藤恵美子さん）

野田双子織は、江戸時代に考案され、一度は消滅しかけたが、昭和55年に入間市の西村芳明夫妻により復元され、現在まで織り続けられている。当研究会はこの技術を永く伝承するための活動を平成6年から継続している。

一方、現代的活用をも図り、地域伝統文化の伝承に尽力している。



すがの会

千葉県

（代表 河西明子さん）

「育てよう子どもたち、大切にしようねお年寄り」をスローガンにして、高齢者が、今までに培ってきた知識や知恵やこころ、そして技術を、子どもたちに伝えるとともに、高齢者自身の生き甲斐として、民話の紙芝居制作・

実演や市内に伝わる伝説をもとにした絵本の作成などを通して子どもたちの健全育成を果たしてきた。

代表の河西さんは、「高齢者が、人からやってもらうばかりでなく、自身でやれることがある」と、民話を掘りおこして絵本を作り、「昔から伝わる日本人の心の持ち方を伝えたい」と話している。



田子高校生創造委員会

青森県

（代表生徒 岩間崇之さん

指導 川代由美子教諭）



田子高校生創造委員会は、校訓の一つ「郷土を愛する人間育成」のもとに、多年にわたり町役場や町民と協調し、全校生徒に呼びかけて町の伝統行事へ参加、ボランティア活動として町恒例の「にんにくとべごまつり」を積極的に支える等の活動により、地域の活性化・振興に寄与している。これは、生徒にとっても郷土愛を学ぶ大切な場所となっている。

ホスピタブルイン ホスピタル 茨城県

(代表学生 岩田美里、小島麻夕子、
谷 尚樹さん 指導 蓮見 孝 教授)



筑波大学芸術学系
学生を中心とする病
院アート・プロジェ
クトチーム3グルー
プ「アスパラガス」
「パプリカ」「フロ
ンティアーズ」は、筑
波メディカルセンターや筑波大学附属病院等で、現場ス
タッフとの協力のもとに、病院内の壁面や空間を利用し
て様々な展示活動を行っている。

これらの諸活動は、患者や病院スタッフの心を癒すも
のとなり、多くの人々から感謝されている。

田宮囃子保存会

茨城県

(代表 矢口修一さん)



田宮囃子保存会は、長年にわたって室町時代から伝わ
る田宮囃子の保存に取り組んできた。
特に、地域の小学生による伝承活動に力を入れて継続
させ、子どもたちの健全育成に寄与してきた。

8年前からは、小学生時代
に田宮囃子を経験した後、活
動から離れていた青年たちに
よって、新たに青年部を発足
させた。

青年部は、地域の行事や郷
土芸能の集いに参加したり、
高齢者の福祉施設などで田宮
囃子を披露し、地域住民との
絆も深めてきた。

個人

星 一彰さん

福島県



星 一彰さんは、県立高等
学校の生物教育に携わる傍ら、
自然観察会運動の実践をはじ
め、会津自然保護協会の創設
に関わってきた。

さらに、組織は県内に拡大
されて福島県自然保護協会と
なり、そこに参画して環境保
全活動や環境教育の推進に尽
力し、その中心的な存在とし
て活躍してきた。

特に、近年のアウトドアブームの到来の中で、尾瀬の
環境を守る取り組みに寄与している。

長船 園子さん

東京都



長船園子さんは、自宅で車椅子生活に頼る重度難病の
夫の介護を続けながら、そのことを契機に公的な介護者
の資格を取得して、自分が住んでいる地域の複数の施設
で、ボランティア活動を始め、およそ10年を経た。

その間、施設利用者にはお
茶をたてその作法を教えたり、
子ども時代を思い出してもら
い、ぬり絵の彩色を促したり
また、長船さんの仲間の俳句
を持参してぬり絵の絵柄にあ
った選句をしてもらったり、
折り紙で壁掛けを作るなど、
施設利用者が楽しみながら機
能回復を図る工夫を継続して
いる。

藤本 文明さん

滋賀県



藤本文明さんは、ベトナム
の障害者問題に関わり、「ベト
ちゃん」とドクちゃんの発達を
願う会」の代表としてベトさ
んへ車いすを贈ったり枯葉剤
被爆被害の子どもたちへの支
援に力を尽くし、関連する出
版活動も続けてきた。

一方、広く日越障害児教育
セミナーにも関わり、ベトナ
ムの障害者・高齢者に関する
長年の研究にも携わっている。

馬場 喜代志さん

大阪府



馬場喜代志さんは、シニア海外ボランティアとして二
度にわたり計4年間、ネパールに赴任し、首都カトマン
ズで無法状態にあった都市交通管理を、初期的な段階か
ら指導し、交通ルールを守る環境作りに尽力した。

当初、信号機はあっても誰
も守らない状態であったが、
交通ルールを守ることが、安
全な生活をしていく上でいか
に大切なことかを、警察官は
もちろんのこと一般市民にも
気付いてもらうための活動を
続けた。また、交通警察官全
員分の白手袋を自費で用意し
て配るなど、交通安全の意識
を高めて来た。

平成 二十二年 「追悼のつどい」開催

本会では、明治18年（1885年）以来、神式で物故者の「合同慰霊祭」を実施してまいりましたが、平成18年から9月（本年は9月11日）に宗旨・宗派を超えた「追悼のつどい」を開催するように変更し、今年度が、その第五回にあたります。

昨年から本年夏までに、ご逝去された遺族の方々に連絡いたしましたところ、30家族、47名の参列をいただきました。本会からも多数の理事が参列しました。

当日は「茗溪会館」二階に祭壇を設け、写真のみの参加の29名を加えて59名の遺影が飾られました。午前11時に開式され、参列者一同が遺影に黙禱後、西野虎之介理事長が「追悼の辞」を読み上げ、挨拶をされました。続いて、来賓として筑波大学学長代理の西川潔副学長が挨拶されました。その後、一同が献花し式は終了しました。

追悼の辞

本日、ここに諸兄弟のご遺影を掲げ、ご遺族をはじめ友人知己等、ご縁の深い私どもが一堂に相寄り、追悼のつどいを開催する運びとなりました。

顧みますと、我が茗溪は、明治政府による新時代の幕開けの礎、近代国家建設を担う指導的人材養成が強く求められ、わが国最初の国立の学校教育機関として、明治5年に東京お茶の水湯島）の昌平黌跡に設立され出発したのであります。

そして今日、茗溪創基百三十有余年を見るにいたり、その間、高い理念と堅固な志をかかげ、多くの先輩がたが新しい国造りに参画し、力いっぱいその道を切り拓いて来られました。

しかし、明治、大正、昭和、平成の各時代を通して、わが国は続く戦乱、天災、不況等とそれはまことに多事多難、試練と苦難に満ちた道のりであり、殊に先の戦争による惨禍は甚だしく、新しい社会時代を託すべき有為の人材を数多失ったことは、この国の中核を担って参りました私ども茗溪人にとりまして、何にも増しての痛恨事でございました。

12時からは会場を四階に移して「懇談会」が開催され、西野理事長の挨拶に続き3人の遺族の方々からスピーチをいただきました。その一部を紹介いたします。

故 伊藤 紘様（昭和27年農教卒） ご長女 伊藤道子様



平成2年に練馬区立桜中学を退職後は夏は登山冬はスキーの指導員として人一倍の健康を誇っていましたが、前立腺ガンで亡くなりました。中年のころからは日本画を描き東京都美術館に出展するほどでした。昭和27年に中野の中学に赴任しました。生徒からはたいへん慕われていたようです。皇居のお堀で魚をとっていた生徒の指導の際におおごにせず収めて、後年になり感謝されました。

しかしながらわが国は、それらの相次ぐ数々の苦難を乗り越え克服して、世界に冠たる平和国家、経済大国を築いて参りました。この間、私どもの先輩がたが、常に茗溪に求められた建学の精神を堅持して人々の安寧と祖国の健全な繁栄を願い、社会の多方面にわたって重責を果たして来られましたことはあまねく世に知られたご功績として私どもの誇りとするところでございます。特に私どもが直接警咳に接し得て、そのご遺徳、ご業績を敬慕申し上げる諸兄弟のお一人お一人は、それぞれにご自分の責務を背負い、教育界をはじめ各界において、わが国の戦後の復興と新しい発展に生涯をかけて献身してこられたかたであります。それはまた、茗溪で培われた精神の実践であり体現でありましたことに改めて心から敬意を捧げる次第でございます。

あとに残されました私どもは、そのご遺徳、ご業績を鑑とし心の糧として堅持しつつ微力を尽くす所存でございます。諸兄弟におかれましても、どうぞいつまでも、私どもをお見守り下さりお導きたまりますようお願い申し上げます。追悼の辞といたします。

平成22年9月11日

茗溪会理事長 西野 虎之介

故 佐藤 豊様（昭和23年文四卒） ご長女 舟井法美様



昨年7月に心臓と腎臓の手術をしましたが、11月に亡くなりました。

3校の新設校の開設に携わり、愛知県立第一工業高校では野球部の部長兼監督を勤め、最後の勤務校は、県立菊里高校でした。

定年後は、大学で学生の指導にあたり、通算40年間、教

職に携わりました。平成10年11月には叙勲の榮譽を受けました。趣味は旅行とお酒で、生涯、茗溪会を大切にしています。

故 山田藤雄様（昭和28年教大地卒） ご夫人 山田愛子様



戦時中は学徒動員にかりだされ、昭和23年に高師に入学しましたが学制改革に伴い、途中から東京教育大理学部に移り昭和28年に卒業しました。最初に兵庫県立龍野高校に赴任しました。車椅子になつてからも龍野高校のクラス会・同期会には出席していました。教え子たちからの弔電には「先生の下宿は我々の溜まり場でした」とあり、本当に深い付き合いのようでした。

静岡県立浜松商業の校長を最後に退職しました。50年間C型肝炎を患い、今年、日赤病院に緊急入院しました。付添った看護師が偶然にも教え子で主人が地理の授業の時に歌ったという「鉄道唱歌」を歌ってくれたのを本人はたいへん喜んでいました。

5月22日に旅立ちましたが、生前から「茗溪会員であることを誇りに思う」と語っていました。ありがとうございました。

茗溪会／秋の公開講座から

筑波と東京で開催

ブランドをつくるプロセス ～飲料パッケージのデザイン／地域ブランド開発～

講師／原 忠信（筑波大学大学院講師
ビジュアルデザイン）

9月25日（土）筑波大学大会館にて
10月16日（土）東京・茗溪会館にて

原 忠信氏には、同じ内容を、筑波と東京で、二度にわたって講演していただいた。原氏は筑波大学大学院建築デザイン専攻を卒業後、アメリカで建築に関わるデザインの仕事をされた。この講座でのお話の前半は、アメリカでの仕事、大手飲料メーカー「爽健美茶」のペットボトルのパッケージデザインがどのようにして進められたかというお話。後半は、大分県津久見市での、みかんの売り出しに関わる地域ブランド開発のお話だった。

*

デザインは色と形のアレンジメントであり、日本語で



「意匠」といわれるように、心に思う気持ち（意）を、優れた技術者（匠）が伝えることだ。だから、送り手と受け手の二つの世界を橋渡しするのがデザイナーということになる。一方、ブランドというのは、顧客の心の中で描く、商品のイメージの総体である。旧ノルド

語で焼き印を意味し、差別化すること、他の商品に比べて、機能的にすぐれていて情緒的価値があることをいう。「爽健美茶」はブレンドティーのジャンルでは最も売れているが、そのパッケージデザインについて、11人のチームで取り組んだ。

はじめに、どんな世界観を作るかについて、ワークショップを行う。ナチュラルな自然という方向が出され、のびやか、さらさら、あたたかみ、などの言葉で表し、色に例えるかどうか表現できるか、形ではどうか、味は、動きは、素材感は、ターゲットは、など9項目について9つのマスでイメージを表現する。これを何とおりも作成し、コンペにかけける。

自然を表現するといっても、モダンな自然なのか、有機的な自然なのか。シンブルなイラストがいいか、写真を使うか。万華鏡のような表現、木の皮を使った表現、芽が出て花が咲いて…という表現、緑の色味をどうするか、などなど。さまざまな表現が実際のペットボトルのデザインとして試作されていた。

自然の風景の中に、自然の恵み、光、水平線、木の間から見える風景、これらを通して、自然の中にあるパワーをイメージとしてとらえようとした。風景の要素を分解して、「ヘルシー」を光で、「ナチュラル」を葉で、「ピュア」を水で表現する。光にはどんな見え方があるか、夕方の光か、朝のさわやかな光か。「風景をボトルの中に閉じ込める」という気持ちで作業をすすめていった。ワークショップから始まってずいぶんたくさんの方が関わっているが、「爽健美茶」の世界観は一貫したものに

なっている。次いで大分県津久見市での、みかんのブランディングをととした地域活性化プロジェクトのお話。

津久見には、みかんの栽培されている美しい段々畑の風景があり、みかん運搬車モノラックのレールが山をたどり、80年以上前からみかんの先祖木がある。ブラン

ディングの作業は、ここでもワークショップから始めた。商工会や地元農家の主婦に集まっていたが、「津久見は一言でいうと〇〇です」という問いから始めて、津久見の夢って何ですか、夢のために何をしますか、津久見のお客はどんな人ですか、という問いかけで「津久見の意見表明」として言葉でまとめていった。次いで、ネーミングとマークのデザイン。そのコンセプトは、歴史や伝統を中心とするA案、生命や自然の恵みのB案、先祖木のストーリーによるC案を提示する。A案が選ばれ、ネーミングも「つく実や」となり、みかんの花の香りがつたわるようなブランドにしたい、ということとなった。町の人たちの集まる場所がほしい、ということになり、その設計にとりかかった。この土地に古くからある「みかん小屋」をモチーフにしたかどうかということを提案。



みかん小屋をモチーフにした店舗の見取り図

しく言い交わしたことも。屋外にはみかんの木を植栽し、みかんを運ぶモノラックとレールを設置して店の中へと誘うように見せた。ここでは、みかんを使った多種類の菓子やロールケーキ、ママレードなどが並ぶ。

この作業をとおして、地もとの人の意識が変わっていった。みかん小屋やモノラックなど、地元の人にはふだん見慣れていても気づかないものに、あらためて価値を見いだす。地域資源を磨きあげて見えるようにしていくと、そこに誇りを感じるようになる。それが地域ブランドとなるのではないかと思う。

【藤原教授の英語のはなし 第3弾】 単語はここが面白い

講師／藤原保明（筑波大学名誉教授）

11月6日（土） 筑波研修センターにて



「藤原教授の英語のはなし」のシリーズは、一昨年「誰が英語を作ったか」、昨年「日英ことば遊び入門」につづき、今回が第3回となった。研修センターで

行われた公開講座の内容は以下のとおりである。

*

1 英語の単語の見方を変える

「文字と綴り方の変化」では、英語は現在26文字から成るが、ラテン文字を借りた頃はiとj、uとvを区別せず、wはなかった。母音字は現在より2つ多く、aæiouyがあり、子音字はlとrがすでに区別されていた。

次に、現在の英語のスペルと発音、文字の綴り方の変化と進み、英語ははじめローマ字ではなく、ゲルマン人

がローマ字にならって発明した「ルーン文字」で表記されていたが、西暦五九七年のキリスト教の伝来以降、ローマ字で表記されるようになり、一〇六六年の「ノルマン征服」によりフランス語を話す人たちが英国を統治するようになったため、フランス式の綴りで記されるようになり、文字と音の対応はかなり崩れた。

一四七六年以降、印刷術の導入により当時の綴り字が広く普及したが、それ以降に生じた大規模な母音の変化には対応できなくなり、綴り字の改良も行われなかった。続く「単語はタイムカプセル」という話としては、約60万語の英単語の綴りの多くは、約500年前の発音に対応したものであるということをも多くの実例で示す。

2 単語の構造と作り方

単語は、接頭辞＋語基＋接尾辞で作られることや、一つの単語から多くの単語がつくられる様子をteachを例にとって説明し、単語と句（phrase）の境界についても実例を挙げる。

3 単語をさかのぼる

西はアイスランドとアイルランド、東はロシア、インド、中国のトルキスタンなどの地域にまたがる広範な地域で用いられている70あまりの言語は、紀元前四〇〇〇〜三〇〇〇年頃までは印欧祖語と呼ばれる単一の言語グループを形成していた。

この祖語が徐々に分化し、紀元前二〇〇〇〜一五〇〇年頃に印欧祖語から「ゲルマン祖語」が分離し始め、紀元6〜8世紀になって、現在のゲルマン諸言語に近い状態になった。

ゲルマン語の特徴については、日常生活でよく用いられる「基本語彙」の多くが共通していること、「印欧祖語」の「高低アクセント」が「強勢アクセント」に変わり、主に「語幹の第一音節」に固定されたこと、「ウムラウト」とよばれる音質の変化を受けていること、動詞は現在形と過去形のみで現在・未来・過去・過

去完了を表わし、進行形は未発達であることなどを説明し、現代英語の単語の「強勢アクセント」や「ウムラウト」による母音の質の変化」などについて詳しく説明した。語源をたどると、eatはtooth, tusk, fretなど、また、sitはset, seat, soot, nestなどと同じ語から派生したことに触れた。

最後に「単語を眺める」として「基数詞と序数詞」「人称代名詞」についての話で講座を締めくくった。

*

終了後、質問に答え、質問者に著書が贈呈された。

ほのぼのの寄席とともに

（福祉施設や地域の方々に公演活動）

講師／笠羽廣夫さんとその家族

明美さん（妻） 美穂さん（娘）

11月27日（土） 東京・茗溪会館にて

笠羽廣夫さんご家族は、身体に障害のある妻と娘とともに、福祉施設や各種イベントで落語を披露する活動を長年にわたって続けている。今回の公開講座では、廣夫さんにこれまでの活動の経過を話していただき、3人の高座を披露していただいた。話の内容は次のとおりである。

*

身体障害のある娘・美穂は10歳のときに、すすめられて落語を始めた。林家とんでん平師匠にも教わりながら、「さえずり亭ひばり」の芸名もいただき、落語のテープを何度も何度も聴いておぼえた。小学校の卒業感謝落語会を開いたのが初舞台である。全員の妻・明美も落語をおぼえ、私は「南京玉すだれ」



と、中国のトルキスタンなどの地域にまたがる広範な地域で用いられている70あまりの言語は、紀元前四〇〇〇〜三〇〇〇年頃までは印欧祖語と呼ばれる単一の言語グループを形成していた。

を演目として、ここに家族による「ほのぼの寄席」がスタートした。

ピースフェスタ港南、浜っ子特別活動など、地域の舞台や新宿福祉事業所や、浜視協設立大会などの福祉関係イベントにも招かれた。たくさんの人に笑っていたことが自信になっていった。

こうした活動を評価されて、娘の美穂はデンマークへ福祉留学の機会を得、次いでモンゴル障害者セミナーへも招かれ、経験を広げていった。昨年の茗溪会顕彰に続き、日本青年会議所の「人間力大賞」にも輝いた。

一方、妻の明美は目に障害があるが、サウンドテーパーテニスやブラインドダンス選手権でも活躍、「ピンポン打って踊れる落語家」といわれ、「多くのありがとうを笑いにのせて」と、明るく活動している。

東京・芙蓉会公開講座

よりよき教育現場の

実現に向けて

～経済同友会の交流活動実践10年の思い～

講師／山中信義（経済同友会副会長）



平成22年10月23日（土）午後2時から約2時間に渡り茗溪会館で「よりよき教育現場の実現に向けて～経済同友会の交流活動実践10年の思い」と題する講座に参加した。

講師にベインキャピタル・ジャパン副会長の山中信義氏をお迎えして、高等学校の校長及び副校長が学校経営の観点からお話を伺い、質疑応答を通じて各自の資質向上に向けて研修を行った。

当日は、都立高校長と副校長の合計21名が参加し、中山氏は60枚に及ぶ資料を用意し、世界経済の動きを基本

*

以上の廣夫さんのお話につづいて演技の披露があった。この日の美穂さんの落語は、「バカに付けるクスリはないよ。ございますよ。皆さんそうおっしゃいますからこの店の薬はバカによくきくよ、と。」などという調子の日常会話から面白い笑いを引き出していった。廣夫さんの「南京玉すだれ」につづいて明美さんも、大きな明るい声で楽しい落語を披露した。

参加者からは、「家族のきずなを強く感じた」「3人の家族の方々の顔の輝き、明朗さ、人間力に心打たれた」「芸名というか会名というか、『ほのぼの』とした明るいムードに包まれて、たいへん感動しました。障害にめげず人生を明るく生き、それを公開していく親子3人の人間力に驚きます。」など、たくさんさんの讃辞が寄せられた。

に、それが日本とどのように関係するのか、また「グローバル化の一方で日本の存在自体が希薄化している」という指摘が印象に残った。さらに、「正しい世界観を基にした問題提起が大切であり、解決策は様々である」という指摘も、新学習指導要領の内容ともあいまって、極めて重要な指摘だった。

質疑応答では4人の校長が手を挙げて、それぞれに中山氏が回答した。「年齢が高い教員の人材育成は」に対しては「企業も同様。15%の人を代えれば60%が変化する。」「人材育成は世界的な観点か、国内市場に目をむけたものか」には、「グローバルか否かが判断の分水嶺目。」「活力のない生徒に活力を注入するにはどうすればよいのか」には、「成功の影には失敗もある。ソーシャル・ネットを構築して連帯感をもたせることが必要。本人の気づきと周りの気づきのマッチングが必要。」「企業と社会の接点を増やして欲しい」には、「地方自治体が主導権をもって実施して欲しい」との回答をされた。

講義の中で「HALFEMPTY（半分も無い）」と、「HALFFULL（半分も残っている）」という考え方や「学校は体験の宝庫」、「経験は直観力を養う」という指摘も印象に残った。

（文責・都立五日市高校校長 小林三代次）

初心者のための朗読入門

連続講座始まる

講師／小川道子（朗読／ナレーション）

10月12日（火）茗溪会館にて



連続講座として始まった「朗読入門」は、10月12日第1回から月2回のペースで続いている。

第1回は、受講者どうしの自己紹介と意見交換が行われた。エンカウンターと呼ばれる方法で、グループに分かれての活動と発表だったので、受講者どうしはたちまち友好的な雰囲気包まれた。

各グループからの発表では、受講のきっかけとして、読み聞かせのボランティアをしているので表現力を高めたい、読み聞かせを朗読に切り替えたい、大きな声を出すことが苦手なので克服したい、地方出身なのでアクセントを学びたい、などが出された。これに対して、音訳、読み聞かせ、朗読などのことばについて小川先生からコメントがあった。

朗読の練習は、「おあやや、おあやまりなさい」という早口言葉を教材にした「口の体操（活舌）」から始まった。

第2回以降も先生のお話と受講者からの発表、そして実技練習ですすんでいる。25人の受講者は欠席者は少なく、3月まで全10回の予定で講座はつづいていく。



茗溪学園だより

グローバル時代の人材育成

「グローバル」。よく耳にするようになった言葉です。何事も地球規模で動いている現代、世界に目を向けて、外国の人達とのビジネス競争においても、今までにない国際的な広い視野や技能を持つていなければならないという、日本人に対する警鐘のような意味もこめて、さまざまな場面で使われています。

11月末、ある教育団体が「英語教育をいかに成功させ、グローバル人材を育成するか」というテーマでセミナーを開催し、本校を含む中学高校三校と二大学が発表をしました。中・高校では、国際バカロレア機構の教育カリキュラムを行っている学校や、韓国の進学ナンバーワンスクールで米国有名大学へも多数の進学者を輩出している学校の発表がありました。それに對し本校は、一般的な教育課程の中高一貫校として、特別な教育方法による英語力向上プログラムと対比される発表となりました。

本校英語教育の取り組み

昭和54年、『世界的日本人』を育成する」ことを建学の理念に掲げて誕生した本校は、まさにグローバル時代に活躍する人材育成を行ってきました。実際、多くの卒業生が海外で仕事をしています。そこで、ここでは、本校の英語教育の取り組みをご紹介します。

各学年に配置された英語行事

英語科の目標の一つに「世界で活躍するための道具としての英語力の育成」があります。各学年に英語行事を組み込み、英語を使う楽しさを体験させます。コミュニケーションの道具としての英語の必要性や重要度を実感し、意欲的に英語に取り組む動機付けとしています。

○中学1年(12月)と中学2年(11月)「英語劇」

クラスの班毎に提示された演目から一つを選び全員が演じます。クラス発表を行い、その中から代表が学年大会に出場します。

○中学3年(2月)「クロス・カルチュラル・トーク」
JICA、筑波大学と連携し、日本に技術研修などの目的で留学している人達(途上国の方が多い)をゲストに迎え、英語でコミュニケーションをします。生徒は、日本の文化を英語で伝え、ゲストの国について予め学習しておいたところから、質問したりします。20カ国以上40名近いゲストが来校し、世界の広がりを実感できます。

○高校1年(2月)「レシテーション・コンテスト」

ケネディ大統領、ヘレンケラー、キング牧師など偉人の有名なスピーチを行うものです。発音やアクセント、視線の置き方やジェスチャーなど表現のためのスキルを養います。各クラスで全員が発表し、代表の十数名が学年発表会に出場します。全員が見守る中、それぞれ偉人を演じきっています。

○高校2年(10月)「海外研修旅行」(メルボルン)

①テーマ研修 各自のもつテーマに沿って各種施設を訪問しインタビューなどを行います。現地の大学生がアシスタントとして同行サポートしてくれます。②ホームステイ 数人ずつに分かれてメルボルン郊外の家庭に2泊します。家庭的な雰囲気の中でコミュニケーションが行われます。③学校交流 交流校は三校あり、それぞれを2クラスずつに分かれて訪問します。一対一のパディを組んで授業に参加するなどの交流活動が行われます。

英語力リキュラムと習熟度別少人数クラス編成

英語の時間数は、中学では週7時間です。中1では、内1時間が外国人教師とのチームティーチングです。中2、3年では2時間が英会話で、外国人教師による授業です。コミュニケーション力をつける狙いがあります。

海外英語圏からの帰国生などは、ネイティブの教師によるハイレベル授業となっています。中学2年生以上が習熟度別少人数授業になっています。

高校では各学年の必修が週6時間です。2年、3年では2〜6時間分を選択履修することができます。高校の習熟度クラスには、ネイティブ教師が英語で行う授業があり(EECと呼んでいる)各学年一割強の生徒がいます。EECは週6時間のうちの2時間で、海外の大学進



写真1: 英語劇 (中学2年)

写真2: クロス・カルチュラル・トーク (中学3年)



学を目指す生徒もいます。本校の特徴の一つである「個人課題研究」も、このクラスの生徒は英語で作成し、英語でのプレゼンテーションも行います。

前年度末の春休みには、代表者三名が中国・上海で行われた研究発表交流会で発表しました。

英語力の把握

CASECとTOIEC・Bridge・IP、TOIEC・IPを利用して、生徒の英語力把握を、頻繁に日常的に行っています。中学3年以上は全員が受け、得点の伸びで向上したことが分り、生徒はもっと勉強しようという気持ちになっています。

留学希望者へのサポート

本校は、海外に飛び出そうという意欲のある生徒の多い学校で、留学希望者が大勢います。AFSやYFU、UWCなどの留学機関の試験を受けて留学することを勧め、希望者に対して放課後に特別レッスンをを行います。

これらの1年または2年間の留学の他に、本校独自に短期(2週間)交換留学制度を設け、海外の交流校五校との間で交換をしています。

以上のような取り組みなど、毎日の授業を通して着実に英語力を伸ばし、グローバル人材としての素養も大学受験に通用する力も、さらに伸ばしていけるよう工夫と努力を続けています。